

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：33921

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2023

課題番号：17K18313

研究課題名（和文）近代日本におけるレクチャー・コンサートの導入：仏・独の比較と音楽政策を視点として

研究課題名（英文）The Introduction of Lecture-Concerts in Modern Japan: From the Viewpoint of a Comparison of French and German Music Policy

研究代表者

白石 朝子 (Shiraishi, Asako)

愛知淑徳大学・文学部・准教授

研究者番号：30758181

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近代日本におけるレクチャー・コンサート（講演を伴った演奏会）導入の経緯を明らかにすることである。これまで、フランス人音楽家アンリ・ジル＝マルシェックスの論考や演奏活動を中心に、その経緯を示してきたが、1920年代-1930年代の日本における「西洋音楽の聴き方」について着目し、近代日本の西洋音楽受容で「レクチャー・コンサート」が必要とされた背景について、その一端を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究によって、近代日本におけるレクチャー・コンサート導入の経緯を明らかにする試みがなされ、「西洋音楽の聴き方」について様々な資料を分析して論じたことによって、日本の西洋音楽受容史研究に一石を投じることができた。現在では盛んに行われているレクチャー・コンサートの先駆けが、1920年代すでに日本でも行われ、1930年代にはパリでのレクチャー・コンサートが詳しく知らされたことは、現代へ続く音楽会の在り方について、示唆を与えることができたと考える。

研究成果の概要（英文）：This study aims to clarify the background of the introduction of lecture concerts (concerts accompanied by lectures) in modern Japan. Up until now, this has been explained mainly through the essays and performance activities of the French musician Henri Gil-Marchex, but this time I have focused on "ways of listening to Western music" in Japan in the 1920s and 1930s, and clarified part of the background of why "lecture concerts" were necessary in modern Japan's acceptance of Western music.

研究分野：思想、芸術およびその関連分野、教育学およびその関連分野

キーワード：ジャポニスム 西洋音楽受容 Gil=Marchex ジル＝マルシェックス 音楽鑑賞

1. 研究開始当初の背景

(1) 国内と国外の研究動向及び位置づけ

近年、日本における西洋音楽受容史研究は、主に作曲家や演奏形態、作品といった視点から行われており、明治から大正・昭和にかけて日本に受容された西洋音楽の流れが明らかになりつつある。(佐野:2010、神月:2010、森:2015 など)しかし、これらは日本における資料をもとにした、そして日本を視点とした受容史研究であり西洋国からの視点を取り入れた相互的な音楽受容史研究は、未だ為されていないのが現状だろう。国外の研究動向としては、昨年から日・仏・カナダの主要な音楽大学が3年計画で共催している国際学会“Le musicien japonais en France ou les rapports France-Japon dans le monde musical”「フランスにおける日本人音楽家：音楽界における日仏関係」からも見受けられるように、日本と西洋との音楽関係が、研究分野として注目されつつあるといえる。

(2) 自身の研究成果を踏まえ着想に至った経緯

アンリ・ジル＝マルシェックス (Henri Gil-Marchex 1894-1970) とレオニード・クロイツァー (Leonid Kreutzer, 1884-1953) は、日本音楽界の発展に大きく関わった音楽家である。研究者は、2010年よりジル＝マルシェックスの活動について研究してきた。彼は1920年代、30年代に国際的に活躍し、フランスと日本の文化交流に貢献したピアニスト、作曲家である。彼は1925年から37年の間に計4回来日し、当時ドイツ音楽を重視していた日本の音楽界に音楽を普及させ、日本の聴衆に様々なテーマで西洋音楽史を講じてピアノ演奏を聴かせた。(白石:2014)クロイツァーは、東京音楽学校での教育に力を尽くしていることから、その活動が研究され、明らかになりつつある。(萩谷:2016、山本:2006)しかし、レクチャー・コンサートの内容、彼のピアノ教授法を詳しく読み解いた研究はなされていない。特にジル＝マルシェックスは、フランスの対外文化政策として外務省から派遣されていたことから、レクチャー・コンサートという形式を重視したことが示されており、日本への影響を明らかにしたいと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、近代日本における「レクチャー・コンサート」(講演を伴った演奏会)導入について、その一端を仏・独の比較と音楽政策の視点から明らかにすることを目的とした。研究当初は、1931年に「レクチャー・コンサート」を本格的に導入した音楽家ジル＝マルシェックスと、同時期に来日したピアニスト、クロイツァーの活動を事例として、仏・独から日本に導入された講演内容を読み解くとともに、フランスの対外文化政策に関する現存資料を精査することによって、それらを明らかにする計画であった。しかし、研究期間内に海外での資料調査ができない状況となり、政策という視点ではなく(1)ジル＝マルシェックスによるレクチャー・コンサートの導入背景、(2)近代日本の西洋音楽受容で「レクチャー・コンサート」が必要とされた背景について探ることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) ジル＝マルシェックスによるレクチャー・コンサートの導入背景

ジル＝マルシェックスによる『音楽解釈の講座』(1931)に着目し、その内容を分析することで、近代日本における西洋音楽受容と演奏会の在り方を捉え直すことを試みた。その視点として、ジル＝マルシェックスの師であるアルフレッド・コルトー (Alfred Denis Cortot 1877-1962)との関係があるのではないかと考え、彼の講演内容について調査・分析した。具体的には、1921年より発行されていた音楽週刊雑誌“Le Guide du Musique”の調査により、1924年からエコール・ノルマル音楽院主催で毎年定期的に行われたコルトーのレクチャー内容を概観し、講義記録等の関連資料によって、その内容を分析した。

(2) 近代日本の西洋音楽受容で「レクチャー・コンサート」が必要とされた背景

1920年代より官主導により東京音楽学校を中心に西洋音楽の教授がなされていく一方で、いわゆる専門家ではない日本の聴衆、音楽愛好家を育てるためにはどのような働きかけがなされたのかについて考察した。具体的には、レコードを用いた田辺尚雄(1883-1984)『西洋音楽講話』(1915)、クレービール著小松耕輔訳『音楽の聴きかた』(1920)、マーカム・リー著・杉浦躬行訳『音楽の一般的知識』(1924)の内容を分析した。また、1931年以降連続した音楽講演がどのように行われたのかを調査した。例えば、東京音楽協会主催により1934年9月から一年間、月一回のペースで音楽講演会『洋楽講話』が実施されたことが挙げられ、それらの内容を分析するとともに、1930年代盛んに行われたフランスのレクチャー・コンサートが紹介されている雑誌記事について検証した。その結果、西洋音楽導入期の日本で「西洋音楽の聴き方」がどのように変化していったのかを明らかにすることを目指した。

4. 研究成果

(1) ジル＝マルシェックスによるレクチャー・コンサートの導入背景

ジル＝マルシェックスによる『音楽解釈の講座』(1931)をコルトーの講演内容と比較して読み解いた結果、両者の引用文や比喻表現等には、共通の主旨・内容が提示されていたことが明らかになった。コルトーは、1924年からエコール・ノルマル音楽院で定期的に演奏講座を行っており、その後、ジル＝マルシェックスは1935年に同音楽院で全12回の『音楽美学の講座(Cours d'esthétique Musicale)』を行なった。当時の新聞記事には、「彼が独創的な内容によって作品の歴史的な背景や新しい解釈を伝えることに成功し、ピアノの名手としてだけでなく歴史家や理論家としても評価された」と掲載されている。

その一方で、両者には違いもみられる。コルトーはフランスで芸術の在り方、そして演奏法に主眼をおいた講座を展開したことに対し、ジル＝マルシェックスは、新しい曲目を日本に知らせる意義、また作曲された歴史的背景に目を向けたといえる。聴衆が育っていない当時の日本において、ジル＝マルシェックスの試みは、新しいものであったといえるだろう。また、彼は日本固有の文化の伝統を重要視することが大切であることも述べ、西洋音楽の受容に夢中であった日本人の聴衆に対して、気づきを与えようとしたともいえる。

彼らが単なるコンサートではなく、講演を伴った「レクチャー・コンサート」を行った背景には、「音楽解釈」を重要視して、それをいかに伝えるかという模索があったといえよう。

コルトーの来日は1952年まで待つことになるが、ジル＝マルシェックスは、1931年に彼の教授法を日本にも伝えようとした。そして、聴衆に対して、演奏だけでなく芸術の理解を促す試みを行っていた。1937年、ジル＝マルシェックスは再来日し、この講座をもとに全国各地の大学で『描写的作品の解釈』等と題したレクチャー・コンサートを開催した。これらは演奏家にピアノニズムを伝えるものではなく、聴衆に芸術の理解を促すものであったといえる。彼の一連の活動は結果的に一般聴衆をも対象としたものに形を変え、日本におけるレクチャー・コンサートの先駆けとなったといえるのではないだろうか。

また、本研究に関連して、1956年にジル＝マルシェックスがフランスの音楽雑誌に掲載した論考をもとに、彼の音楽観についても考察した。彼にとって「レクチャー・コンサート」がどのような意図で行われていたかを明らかにするまでには至らなかったが、フランスで活躍した作曲家との交流、フランス・ピアノ音楽史について探り、彼の音楽観について明らかにすることができた。

(2) 近代日本の西洋音楽受容で「レクチャー・コンサート」が必要とされた背景

西洋音楽導入期の日本では「西洋音楽の聴き方」がどのように示されていたのかについて、1910年-30年代の音楽講話を視点として検討した。

1915年、田辺尚雄によって岩波書店から出版された『西洋音楽講話』は、田辺が私立東洋音楽学校で1915年8月1日から10日まで行った夏期講習会での講演内容を補正、まとめたものである。また、『西洋音楽講話』出版の5年後、1920年にヘンリー・エドワード・クレービール(Henry E. Krehbiel 1854-1923)『音楽の聴き方 How to listen to music: hints and suggestions to untaught lovers of the art』が小松耕輔(1884-1966)によって翻訳され刊行された。そして、1924年には田辺が校閲、杉浦躬行が翻訳したマーカム・リー(Ernest Markham Lee 1874-1956)の『音楽の一般的知識』が出版された。マーカム・リーは、イギリスの作曲家・音楽評論家であり、原著は1918年に出版された『On Listening to Music』である。これらは、いずれも専門家を対象としたのではなく、聴衆を育てるために音楽鑑賞に必要な知識や理論について説かれていたことが示された。なかでも、『西洋音楽講話』は音楽について偏りなく「公平に」聴く方法を伝えていた。

次に、1931年以降連続した音楽講演がどのように行われたのかを調査した。その結果、1930年代フランスで盛んに行われた講演と演奏による「レクチャー・コンサート」が、当時フランスに滞在していた山田忠夫によって、日本でも紹介されたことが明らかになった。それらは、「(A)演奏付講演会、(B)講演又は解説付演奏会、(C)演奏講習会、(D)講演演奏会」の4つに分けて報告され、「レクチャー・コンサート」の形式を示すものであった。

そして、東京音楽協会主催により1934年9月から一年間、月一回のペースで音楽講演会『洋楽講話』が実施されたことが確認された。日本で講演と演奏を伴った本格的な「レクチャー・コンサート」が行われるのは戦後まで待たなければならないが、レコードを用いた方法であっても「西洋音楽の聴き方」について講演という形態で示されたことは注目すべきことだろう。これらの内容を検証することにより、西洋音楽導入期の日本で「西洋音楽の聴き方」がどのように変化していったのか、その一端を明らかにすることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 白石朝子	4. 巻 49
2. 論文標題 日本における西洋音楽の聴き方に関する一考察： 1910年-30年代の音楽講話を視点として	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 愛知淑徳大学論集 文学部篇	6. 最初と最後の頁 191-202
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 白石朝子	4. 巻 69
2. 論文標題 アンリ・ジル=マルシェックスの音楽観に対する一考察：「フランスの作曲家のピアノ言語」(1956)をもとに	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 名古屋女子大学紀要 人文・社会編	6. 最初と最後の頁 233-242
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Asako SHIRAIISHI	4. 巻 Mars
2. 論文標題 Henri Gil-Marchex (1894 1970), ses oeuvres et Japonisme	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Memoire sonore du Japon, le disque, la musique et la langue	6. 最初と最後の頁 pp. 128 142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 白石朝子	4. 巻 66
2. 論文標題 「アンリ・ジル=マルシェックスの『音楽解釈の講座』（1931）アルフレッド・コルト の講座内容との比較を視点として」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 名古屋女子大学紀要 人文・社会編	6. 最初と最後の頁 285-295
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 白石朝子
2. 発表標題 Henri Gil-Marchex (1894 -1970), ses oeuvres et Japonism
3. 学会等名 Memoire sonore du Japon :le disque, la musique, et a langue (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 白石朝子
2. 発表標題 『近代日本のレクチャー・コンサート導入に関する考察 講演者アンリ・ジル＝マルシェックスのレクチャー・コンサート、その内容と意義』
3. 学会等名 第69回日本音楽学会全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 白石朝子
2. 発表標題 『アンリ・ジル＝マルシェックスによる「音楽解釈の講座」(1931)の検討 近代日本における西洋音楽受容と演奏会の在り方を視点として』
3. 学会等名 第37回愛知音楽研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 白石朝子
2. 発表標題 アンリ・ジル＝マルシェックス『フランスの作曲家のピアノ言語』(1956)から読み解くフランス・ピアノ音楽の変遷
3. 学会等名 第59回愛知音楽研究会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------